

会議の概要(要旨)

1	会 議 名	平成30年度 第2回習志野市市民協働こども発達支援推進協議会
2	開 催 日 時	平成30年11月13日(火) 午後1時～3時
3	開 催 場 所	ゆいまーる習志野 福祉交流スペース
4	出 席 者	<p>市民協働こども発達支援推進協議会委員 大塩委員(会長)、阿部委員(副会長)、遠藤委員、吉野委員、臺委員、小野寺委員、伊藤委員、松尾委員、佐久間委員、山口委員、矢島委員(代理)、齋藤委員、相澤委員、芹澤委員、北田委員、家弓委員、荒井委員、木下委員</p> <p>こども部:小澤部長、小平次長</p> <p>発達支援サポートネットワーク会議委員:木村委員(会長)、嶋野委員(副会長)</p> <p>事務局:ひまわり発達相談センター 内村主幹、續主査、吉村、中村</p> <p>傍聴人:3名</p>
5	議 題 及び 会議の内容	<p>第1 習志野市発達支援サポートネットワーク会議の報告(発セ 續主査)</p> <p>ライフサポートファイル作成の経緯として、習志野市は、乳幼児期からの継続的な支援を目的として、平成17年度から国や県に先行して取り組みを進め、20年度に乳幼児期は「乳幼児個別支援計画」、小中学生期は「個別の教育支援計画」として試行事業を開始し、検討を重ねながら現在に至っております。運用から10年が経過した現在、乳幼児期では680名、小中学生は737名が個別支援計画を作成しております。</p> <p>昨年度、習志野市障がい者地域共生協議会様からの意見書にて、本市の取り組みに肯定的な評価を頂いておりますが、アプローチが教育分野までのものである事に御指摘を頂きました。この御指摘を受け、福祉サービス等も含め、各ライフステージを通してよりよい支援が受けられるようになり、また御本人の必要な情報を周囲に理解してもらうためのツールとなり得る「ライフサポートファイル」の検討を、ネットワーク会議に御提案させて頂いたところでございます。</p> <p>・ライフサポートファイルについて(ネットワーク会議 木村会長)……資料1、2及び8</p> <p>10月23日開催の第2回ネットワーク会議にて検討しましたライフサポートファイルについて御報告いたします。作成方針として、「①乳幼児個別支援計画・個別の教育支援計画を使用する」、「②一生涯、保護者・御本人が保管する」、「③記載内容の整理等、保護者や教職員の作成に対する負担感を軽減する」、「④地域共生協議会や民間事業者、保護者団体と連携を図り、実情に即した運用を目指す」、「⑤31年度に試験的運用をして32年度の運用を開始する」にて取り組んでおります。お手元にこの検討を受けて整えたライフサポート(案)を配布しております。</p> <p>ライフサポートファイルは仮の名称であります。プロフィールを先頭に載せ、乳幼</p>

児期、学齢期、青年期、成人期のライフステージに分けて綴っていく作りとしております。末尾の付録は保護者・御本人が選んだ情報を追加していくものとして設けております。

協議

北田委員：障がい者地域共生協議会の児童部会様より御意見を頂いております。

広報・啓発について、「記載方法の説明会やチラシ等、具体的な活用方法を示すことが必要」、「いつからでも作成できるよう就労後の事業所等に周知してほしい」、「最初は保護者に直接の手渡しを検討してほしい」と頂いております。

内容について、「保護者・事業者の負担感軽減に繋げたい」、「必要な箇所だけ記入、気付いた時に記入等の柔軟な運用も可能と記載があるとよい」、「現在の小学校への引継ぎが有効であり、継続的な実施や活用を期待する」と御指摘頂いております。また、レイアウト・書式は、「文章が硬い」、「簡潔なタイトルや年齢欄を作る等でページをわかりやすくした方がいい」、「乳幼児期の様式が細かい印象を受ける」、その他として「書くことが苦手な保護者もいるため、紙媒体だけでなく、電子データ化も検討すべき」と御指摘を頂いております。

臺委員：みんなで意見を出し合うことは、作成の大切なプロセスである。習志野市は先駆的な取り組みやその課題もあり、内容は網羅している。全国の市町村のライフサポートを評価・分析している中で、この案に意識して拾い上げていけるところとして、3点をお伝えしたい。1点目として、母子保健との連動が想定されておらず、別々の書式を使ったり活用されずに支援がなされていたりする状況が見られる。

2点目として、大きな動きとして、当事者主体の話が出てきている。保護者・支援者主体から、理想的な話かもしれないが、青年になった本人が読み返して、成長を確認できること、また、こういうサービスを使いたいと意思表示や交渉に活かすことも考えられる。

3点目として、保護者、支援者、子ども自身が使っていくことが負担にならない形として、保育ポータルフォリオ、電子媒体、全部を埋めなくても使える様式等の方法が考えられる。こういう形でのファイリングが難しい保護者は、支援や受診の書類や子どもの写真に日付を書いて、ファイルボックスにぽんぽんと入れていくだけで、子どもの成長がひとつのポータルフォリオになる。子どもの話や先生から聞いた話のメモを入れていき、子どもの足跡となる。

松尾委員：ストレートな書き方でいいと思う。実用的に運用されていくように、親が書き始めるまでの必要性の認識をどうやって作っていくか。受け取る事業所側もどうやって使っていくか。これから検討や周知が大切である。保護者に「ライフサポートファイルを持っていますか」と確認して支援に使っていけるような、支援者側からのアプローチにも繋がっていくといい。

山口委員：乳幼児期は先生が書くところや保護者が先生と一緒に作っていくところがいっぱいある。こども部、教育委員会の連携を大切にしたい。併せて、母子保健とも繋がられる部分がある。名称はこれから素敵なものを考えていければと思う。

大塩会長：本人が主体となって記録を積み重ねていけるような名称を考えていきたい。母子保健との連携も検討していきたい。これまでの取組みを評価し、今後に活用したい。

遠藤委員：療セでは、毎年先生と子どもの成長やできるようになったことのフィードバックがあり、家族で受けとめていくことに繋がった。特に乳幼児期は、支援に関わる保護者、支援者全体でやっていくことが大切である。それが就学前から小中学校の先生へ繋がっていく。

大塩会長：真っ白いページは書きづらさがある。下線や点があったり、とっかかりやすい言葉があったり、レイアウトの工夫があると書きやすくなる。みんなで考えていきたい。

第2 習志野市こどもの発達支援に関する基礎調査からの取り組みについて

・つだぬま盆踊り大会への参加について(事務局 續主査)

小藪委員の御協力を頂き、8月25日開催のつだぬま盆踊り大会に参加いたしました。子どもたちは、保護者様、発セ職員、ボランティアスタッフともに出掛けてまいりました。地域の方々は思っていたよりも温かく、壁を作らず、柔軟な対応を頂きました。保護者からは今後は地域のイベントに出かけてみようと思える機会となったと御感想を頂きました。今回、体験してみないと分からなかった事を他の地域に発信しながら、地域で企画されている数多くのイベント、社会資源の情報収集を行い、子どもの状況や発達に応じたイベントを周知し、参加の後押しをしていきたいと思っております。

・きらっといっぽの会2017活動報告(伊藤委員)

情報発信の活動として、今年度、きらっといっぽの会2017はホームページに体験記ショートあるあるを連載している。先日、保護者がどういふことを知りたいか聞きたため、療セの保護者会に行った。その時にホームページを見たことがあるか質問し

たが、一人もいなかった。実際に見て頂き、先輩たちの体験が読める、知らない人
たちから支えられている感じがする等の感想を頂いた。保護者が知りたいと思っ
ている情報は、障がい児を受け入れている歯医者や習い事などであった。後日、千
葉県や習志野市の歯科医師会ホームページ掲載の受け入れ医院一覧をお渡しす
るとともに、習い事は個人差もあり、公益性の観点もあり、一覧にまとめたの情報は
難しいとお伝えした。

また、療セの保護者は診断を受け入れて、乗り越えて、親子で通っている。今の
自分が困っていることを出していける。誰にも言えず、ひとりで悩んでいるまだ見ぬ
親子もいる。この2つそれぞれの方向性で、継続的に情報発信を探していきたい。

協議

小野寺委員：保護者会との話を通じて、子どもが小さかった頃の自分もこうだった
と思い出すことがあり、何かできることをしていきたいとやる気が出た。
モチベーションに繋がった。

大塩会長：伊藤委員が言うように、相談できる人は腹を括っている。まだひとりで
抱え込んでいる人にどう出していけるか。いい手立てを考えていき
たい。

吉野委員：グレーゾーンの子どもの持つお母さん、障がいがあると分かっているお
母さん、そこに届いていないお母さんと様々である。母子手帳と一緒に
全員に配布できる形もよいと思う。

大塩会長：教育支援委員会で年間300件以上の発達障がいに関わる審議をして
いる。自閉症・情緒学級の子どもの数は増えている。来年度は新設の
学級も加わる。

荒井委員：来年度、小中学校に、施設・設備のないところは除いて、自閉・情緒学
級を開設する。ニーズが高まっている。国県の動向も確認している。教
育支援委員会ではより適切な支援となるよう回数を分けて審議をする
等、毎年改善を考えている。

大塩会長：全学校に固定の学級ができる。教育、支援が受けられる環境が広がっ
ていく。

第3 習志野市こどもの発達支援に関するモニタリング調査集計結果の報告(事務局 内村主幹)……資料3、4及び5

発達支援に関するモニタリング調査を実施いたしましたので、集計結果を御報告
いたします。27年度の基礎調査は配布1,005人中の回答542名で回答率53.
9%でした。回答者の半数が未就学児の保護者でした。30年度のモニタリング調

査は1,124人中の572名で50.9%でした。半数が特別支援学級等の就学児の保護者でした。

前回と比較すると就学児が多いことから、問2-2「課題や心配の内容」で読み書きなど学習面が増え、問2-3「現在利用している行政施設」で特別支援学級、また、問2-4「よく利用する相談先」も学校・教育機関、放課後等デイサービス等の民間療育施設、病院・医療機関が多くなっております。

いずれの設問も、前回とほぼ同様の回答傾向でございます。「分からない」、「どちらとも言えない」の回答が多いです。問3「偏見や誤解」、問4「差別や排除」、問5「配慮や尊重の風潮」、問6「社会参加」は、偏見や差別が減ってきたという肯定的な回答が否定的な回答をやや上回っております。問7「学校」、問8「地域」、問9「就労活動で」は否定的な回答をやや上回っております。

問10から12「行政支援の状況」は、相談環境や関係機関の連携は肯定的な回答が上回っているが、情報提供は否定的な回答をやや上回っております。相談しやすい環境だが、必要な情報を得られていない状況が前回と同じく示されております。

問13から14「子どもの環境」、問15から17「地域社会の状況」は、学校などの所属機関においては肯定的な回答が多いが、就職・就労では否定的な回答が多くなっております。所属機関を出た後の社会状況は厳しいものであるという認識が前回と同じく表れております。

保護者とそれ以外のグループの平均値の差を比較すると、前回と同様の傾向として、ほとんどの設問に対し保護者の方がより好ましくない状況であると回答しております。保護者の満足感、安心感に変わりがないと、なかなか調査結果としても変化が出てこないものと思われまます。また、保護者がより好ましくない状況と評価している項目は、就労、就職、地域イベントであり、前回と同じ項目であります。支援者はこれらの項目で現状の認識にギャップがあることを意識し、これを埋めていく必要があります。

まだ分析途中ですので、引き続き進めて報告書として取りまとめていきたいと考えております。

協議

芹澤委員：分析にあたって、前回の結果を受けて、各課でどのような取り組みをしてきたのか集約して考えたい。2年半の期間でどのくらい変わるかというと、あまり変わらないかもしれないが、ロジックモデルの中の直接目的に即してそれぞれ具体的に何をしたか。それによって、どのように変わったか。仮説を立て、分析していきたい。データは持っているか。

内村主幹:各課にお願いして集約というものは行ってない。

大塩会長:今年やっていないところもあるかもしれないが、重点的に取り組んだものへの評価は大切である。これは成果が上がった、ここはできなかった等、各課で具体的に出てくるものをまとめることで、良い面や悪くなった面を分析でき、次の取組みに繋がる。

遠藤委員:ロジックモデルに取り組んできたが、どう進んでいるのか、どのように展開されているのか、感触として見えてこない。たった数年では出ないものなのかもしれないが、取組みが見えてくるような、また、横と横の繋がりがあのような、市民に見えて検証に繋がるやりとりがよい。

大塩会長:ロジックモデルは目的に至るまでを体系化するもので、実際に各課で取り組んでいるものは施策である。PDCAサイクルのC、評価の部分が見えてこないということはあるが、きらっといっぽの会2017等、いい取組みも出てきた。調査結果では、学校での差別、保護者との認識の違い等、他にも必要な面があると出ている。千葉県はいじめの件数が多く、この問題に教育委員会の指導課と総合教育センターで連携して取り組んでいるところである。

阿部副会長:ライフサポートファイルも同じことが言える。作ったらお終いではなく、どなたが見ても分かりやすいものを作ってほしい。数字やグラフで読み取れないものもある。単年度戦略の洗い出し等、数字に出ないところでも、こういう取組みができたと出せるものがあると思う。

第4 習志野市市民協働こども発達支援推進協議会の今後の方向性について(事務局 北田所長)……資料6、7

協議会は平成31年3月で任期満了となります。再度4月から3年任期で委員委嘱を行い、協議会を継続してまいります。このことについて、より充実した施策のため、子ども・子育て支援事業計画への取組みを提案させていただきます。この計画は、子育て支援サービスの必要量、提供施策、提供体制の整備への取組みをまとめているものです。計画の構成としましては、基本理念「子供の健やかな成長をみんなのやさしさで支えるまち習志野」に、基本視点「自律力」、「家庭力」、「地域力」の3つがあり、それぞれ基本目標や方針、施策に繋がっております。

27年4月の5年間で策定した現行計画を見直し、32年4月からの5年間の新規計画について策定準備を進めているところであります。こちらに、今も発達支援施策が載っていますが、協議会からの御意見を提案し、ソーシャルインクルージョンや障がいの有無に関わらず自分らしく生きられるための考え方を反映していきたいと考えております。

29年4月に発せが健康福祉部よりこども部に移管となり、子ども・子育て施策の視点の中で、乳幼児期の教育・保育、地域における多様な子育て支援サービスへの反映は大きな強みであると考えております。子ども・子育て支援会議に意見として伝え、施策の計画に入れてまいりたいと考えております。

協議

大塩会長：子ども・子育て支援計画にも、障がい者基本計画等にも、それぞれ基本視点や施策体系が載っている。子ども・子育て支援計画では家庭力の「2-2-⑤特に支援が必要な子どもに対する支援体制の充実」と「⑥障がい児施策の充実」の2点しかない。整合性があり、障がいに焦点を当てた施策があってもいいのではと思う。どこかに位置づけが必要なものである。

木下委員：来年度の特別支援学級の開設に向けて、総合教育センターと一緒に説明会に参加している。新規開設には保護者、学校の先生の理解が必要となってくる。いじめ問題は指導課、学校と一緒に考えている。モニタリング調査の集計結果では、学校での課題が見えてきた。

また、療セの運動会に参加した際に、保護者が明るく、先生方もすごく工夫していて、おじいちゃん、おばあちゃんも一緒に見守っていた。参考にしていきたい。また、伊藤委員が先程おっしゃっていたように、そうではなく、一人で抱えている保護者もいると頭に意識していきたい。

家弓委員：療セに通い始めた方は悩んでいたりと、涙を流すこともあったりするが、他の保護者と話していく中で、明るくなっていく。情報発信と、それに対する保護者の受け取りのギャップは、ネックである。保護者に歯医者はこちらで受けられると直接出しているし、また、きらっといっぽの会2017のチラシも配っているが、行き届かせることは難しい。

事業所はどこもアセスメントをしっかりとしている。保護者が何度も同じ話をしないといけないこともある。ライフサポートファイルの付録は使い勝手がよくて、活用させられるものへ、そして事業所の計画も入れて使えるものへ考えていきたい。

相澤委員：児童虐待への対応でファイルを使っているが、支援が必要で、情報が膨大なものになると、使うときに負担となる。ポイントを押さえたもの、概略を掴めるものであるとよいと思う。

齋藤委員：保育所に入るときも書いて、支援を受けるための保育指導委員会でもより詳しいものを書いて、ライフサポートファイルも書くことになると3つとなる。なにか負担とならないうまい方法があればと思う。支援を要す

る方は小中学校でも増えている。保護者の困り感に繋げていける部分を考えていきたい。

矢島委員代理:障がい児の施策を障がい福祉課、発せのどこが担っていくのか。子育ての一環として移管したが、障がい福祉サービスや相談は障がい福祉課で行っている。ソーシャルインクルージョンの視点もあって、どこかで考えていただければと思う。

北田委員:各課に持ち帰って頂いて、ロジックモデル、行政計画、考えて頂きたい。

佐久間委員:市民協働の考え方として、市の中ではなかなか解決できないものを市民の力で解決していきたい。こういう場でまとまっていく、考えていく、市民協働の場である。

矢島委員代理:障がい福祉課で障がい理解のための啓発事業として、今年度は1月27日(日曜)に、大阪大学の長井准教授を講師にお招きし、自閉症スペクトラム症の方が「見ている世界」を知る体験講座を開催する。

第5 その他(事務連絡等)

第3回協議会は平成31年2月14日(火)午後1時30分～ ゆいまーる習志野福祉交流スペースにて開催予定です。協議会終了後、評価部会も開催させていただく予定です。

閉会